

## 24 時間は営業中

経済学部経営学科教授 白石俊輔

### 1 はじめに

タイトルの 24 時間は、「アマゾン」は**年中無休**で営業中 (24 heures sur 7) [41] という、ふつうな日常表現 (たぶん) をもじりました。平成 17 年・18 年と 2 年間 Learning Management System を使った授業を担当していますが、LMS の準備と後始末に週に 24 時間かかっていると読んで下さい。ということで、あらたのテクノロジー登場の際にはありがちな、お約束の「悪戦苦闘記」のつまんない枕<sup>1</sup>をふって、短い本題を♪

### 2 コースの概要

本号の特集テーマである「学習管理システム」の趣旨は理解していますので (たぶん)、この節だけはまじめな情報を提供します。

#### 2.1 基本情報

- 授業名：経営モデル分析 (2 単位)
- 対象：経済学部 2 年次以上
- 受講人数 (実数)：40 名弱 (18 年度), 50 名弱 (17 年度)
- 使用教室：総合情報基盤センター 4F 端末室
- 使用 LMS：WebCT (18 年度), Blackboard (17 年度)
- 学習内容：エクセルを使ったファイナンスの数理計算 (DCF 法, ポートフォリオ等)

#### 2.2 LMS

17 年度のことはかなり忘れてしまったので、18 年度に使用した WebCT について説明します。WebCT

<sup>1</sup>枕としてつまんないだけでなく、わるのり・モードで書いていることのいいわけも含意しています。文体が軽はずみだったり、長くて well-organized ではない参考文献をつけたりと、「ふざけなさんな」のご批判をあらかじめ承知したうえでの、矛先躲しです。

は商品だけあって、いわゆる充実した機能 (WebCT ではページまたはツールといいます) が備わっています。主に使った機能は、(1) ページ (2) 評価ツール (3) コミュニケーションツールの 3 点でした。その中で、当初期待した機能は、評価ツールに含まれている「課題提出・返却」機能の 1 点です。On the ground[28]での「まるつけ」がすっかり身にしみてしまっているので [36, 38]、実際にはこの On line での「課題提出・返却」に毎回四苦八苦しています。



図 1: WebCT ホーム

(1) のページ機能を使って、コンテンツを開発し、それを使い回しすることで効率化を図ることを eラーニングの目的に捉えることもできるでしょうが、そうはしませんでした。コンテンツは html で書き大学の WWW サーバに載せ誰でも見られるようにしました [37]。私なりの Open Course Ware の解釈だと思って下さい ([21]~[28]) をすつとばしながら読んだ上での結論です。きがねなくオープンにしたかったので、アイコン等も自作<sup>2</sup>しました (見づらい図 1 を参照)。

ただし、本学では WebCT は学外からもアクセスできますので、学生にとってはほとんどメリットはないと思います。学生がコンテンツの作成にまで関与できるようになると、すこし位相が違ってきそうな予感があります (この方面の先進的な取り組みは、千歳科学技術大学の [39] がすごく参考になります)。

#### 2.3 学生の目

学生の立場でいうと、たぶん次のように授業は進んでいます (かなり誇張もしてますが)。

1. できれば遅れないように、取りあえず出席する
2. WebCT にログオンする

<sup>2</sup>ただし自分でイラストを描いたのは一部 (特段にへたなやつ)。

3. 授業前テスト (多肢選択式) があるので、ちょこちょこやる (一応点数がついてくるので、できないとちょっと心配)
4. 先生は何かしゃべっているけど、WebCTにはいつものように作業手順がホームページになって、聞かなくてもできるので、エクセル開いて今日の分をさくさく打ち込み
5. 応用問題の課題ができれば提出 (課題からやっちゃうってのもありだよね♪)
6. 1分間アンケートがあるので、感想もちょっとだけ書いて提出 (時間内に提出すれば、その日は出席になるらしい)
7. 今日はやめに終わったので、ゆうべ気になったあれをググって、あと mixi して、お昼ごはん♪

## 2.4 24 heures sur 7

週に 24 時間 (概算、評語的なので厳密性なし) この授業の準備と後始末に使っています。内訳は準備 20 時間、後始末 4 時間というところでしょうか。実際の授業時には、簡単に当日の実習のアウトラインを述べて (長くても 30 分)、あとはフロアをうろろして、操作やもろもろの分からないところについての質問を受けています。この時間にちゃんと解決してくれれば、後始末に使っている 4 時間が半分くらいになると思いますが、そうは問屋がおろしていません (現状)。

## 2.5 チャットのおもわぬ使い方

機能のうち、(3) のコミュニケーションツールには当初まったく期待していませんでした。もちろん iii-online[25, 40] のように掲示板がかなり有効に働いている例もあります。一方、コースの online 化がもたらす弊害としての、24 時間オフィスアワー化 [26] を耳学問で知っていて、それは勘弁してくれと思っていましたから、リアルタイム・オンラインでの質問・回答をすることは行いませんでした。もちろん前述のように、on the ground でもちゃんと質問してくれないのはふつうですので、その代わり毎回、これも WebCT の機能にあるアンケートを用いて、匿名の質問を受け、それに WWW ページで簡単に答えるという段取りをしておきました。結果としていうと、「本

質的 and/or 具体的な質問」はあまりありません。ですから、LMS の設計者が考えたコミュニケーションツールの性能についての評価は ??? です。

ひろいものだったのが、チャット<sup>3</sup>でした。ここ何年か、オークション実験を持ち芸<sup>4</sup>にしていますが、チャット上のオークションはかなり白熱しました。1,000 円で手に入るスクラッチくじに、わずか 1 分ほどの間に 3,000 円の値がつくほどでしたから。

## 3 正しい方法でうそを構成する

コンテンツ作成に関わるのは結局教員だけですから、いくら OCW でどこでも誰でもいつでもとんでみたところで、これまでの LMS 的発想に拘泥し続けている限り、中央集権的で統制的なシステムは教員に高い負荷量を与え続け、24 heures sur 7 の状況は改善されないと思います。多彩な LMS の諸機能は、コースデザインに大きな自由度があるようであり、実は LMS の基本設計にコースデザインが引っ張られてしまうことも実感しています。できるから、つつい作ってしまうクイズなんかはその代表例でしょう。クイズには配点をすることが義務づけられているのも、めんどろな学習の実質評価はおいといて、便利な代理指標であるクイズの点数を使って評価してしまいたくなる (たぶんゆがんだ) インセンティブからくるモラルハザードを惹起するという点で、適切な成績評価とはかけ離れたものになる懸念があります。

また、e ラーニングそのものが、本質的には情報過多の海に個人の行動を隠してしまう性質を持っていますので、ここでもモラルハザードが惹起されます。一例をあげましょう。2.3 節の「学生の目」のところでも触れましたが、学生によっては提出を義務づけられているものだけしか手をつけないというケースがあります。つまり、当日のコンテンツはすっかりすつとぼして最後の課題にまず手をつけるような行動をするのです。教科書の途中のページは読まないで、章末問題だけやってお終いと例えれば分かりやすいでしょうか? 学習者のインセンティブのありよう [1, 2] よりも、「べき論」が先行すると、中央集権的で統制的なシステムは、やっぱりうまく働かないように思

<sup>3</sup>今は、on the ground で先生に質問するより、online で誰かとつながる方がふつうの行動なんだろうね。この授業でも課題が終わってあまった時間を mixi しましたから。

<sup>4</sup><http://groucho.eco.u-toyama.ac.jp/experiment/experiment.html>

ます。つまり教員も学生も「正しい方法<sup>5</sup>でうそを構成」する *génération perdue*<sup>6</sup> な同時代の共犯者としてのシニカル気持ちになります。さらにこれを、創造的なトリックスターとはいえない私に限れば、「これは俺の技なのだ、コヨーテよ。お前の技ではない [9]」と、冷たく突き放されているだけなのでしょう。

ところで、はやりの Web2.0 的発想 [29] は、金子 [20] がコミュニティ・ソリューションとよんだユーザー参加による分権的かつボランタリーなシステム・デザインであり、その有効性は災害発生時のような非常時に極めて有効であるのをはじめ [18, 20]、千歳科学技術大学 [39] のように人を育てるシステム<sup>7</sup>として高等教育の現場でもその有効性が確認される例が多くなっているようです。これからの LMS には、こうした方向性でのブレイクスルーを期待しています。

さらに付け加えると、これは私が知らないだけなのかも知れませんが、大学の IT ファシリティを使って、簡単にブログや pod casting ができれば、LMS に頼らなくてもかなりなことができそうな気がします (根拠はありません。気がするだけ)。もちろん本気なら民間のものを利用すればいいだけなのですが、「やっぱ .ac.jp がついてないとね」と、肩書きで仕事をする年齢になっちゃったので、余計にそう思います。

## 4 やってなかったの？アナリーゼ

筆の勢いは、Web2.0 がいい事づくめみたいな感じですね (そうでもありませんか?)。実は大学はそもそもユーザー参加による分権的かつボランタリーなシステムですよ (そうなので、企業も大学のガバナンスの仕組みを取り入れています [19])。さらに大事なのがやっぱりリアルなキャンパスですよ。キャンパスは「経験を共有する異空間」であることが本質かなと、かなりのパーセンテージ受け売り (例えば [6]) ですが本気でそう思っています。それを勘違いして、方向性を間違えると「大学にまで行ってたんだろ？やってなかったの？アナリーゼ [10]」ってなことになるって、せつかくの Web2.0 の波も LMS も大学の学校化を押し進めるだけのかえってよかったい事になるという、つまらない結論でお終いにします。

<sup>5</sup>ここでいう正しい方法には、キャンパスという異空間からサイバースペースという世間に出て行く事のコストとしてのコンプライアンスも含まれます。けっこう痛いものです ([30]~[36])。

<sup>6</sup>C'est vrai que nous sommes tous une *génération perdue*. [42]

<sup>7</sup>「人を育てるシステム」としての TA 制度については、荻谷 [15] がおもしろい。

## 5 へびあし

「大学にまで行ってたんだろ？」という大学にならないための処方箋<sup>8</sup>として理解したつもりになってるのが、[3]~[17] デス (と [10] モードで)。

その浅薄な理解では、透明で開かれた<sup>9</sup>キャンパスでの、アドホックなメンバーによるコミュニケーションなアクティビティってというのが、これからの Learning の方向性のようです。ここで報告した授業にご関心を持っていただけたなら、私自身は「恥と自慢の区別がつかない」方ですので、**いつでも授業 [37, 38] を見に来て下さい**。待ってます♡♡♡

## 参考文献

- [1] スティーブン・D・レヴィット, スティーブン・J・ダブナー, ヤバい経済学, 東洋経済新報社, 2006.
- [2] 梶井厚志, 故事成語でわかる経済学のキーワード, 中公新書, 2006.
- [3] 柴田元幸, 翻訳教室, 新書館, 2006.
- [4] 潮木守一, 大学再生への具体像, 東信堂, 2006.
- [5] 高橋三郎, 新田光子, 大学生入門 改訂版, 世界思想社, 2006.
- [6] 美馬のゆり, 山内裕平, 「未来の学び」をデザインする 空間・活動・共同体, 東京大学出版会, 2005.
- [7] 船曳建夫, 大学のエスノグラフィ, 有斐閣, 2005.
- [8] 山田礼子, 一年次 (導入) 教育の日米比較, 東信堂, 2005.
- [9] ルイス・ハイド, トリックスターの系譜, 法政大学出版社, 2005.
- [10] ニノ宮知子, のだめカンタービレ # 11, 講談社, 2005.
- [11] 蓮實重彦, アンドレアス・ヘルドリヒ, 大学の倫理, 東京大学出版会, 2003.
- [12] 中野民夫, ファシリテーション革命 参加型の場づくりの技法, 岩波アクティブ新書, 2003.

<sup>8</sup>組織としてではなく一教員としては [17] の松苗先生みたいなのが原風景 (全然違うものになっちゃいました)。

<sup>9</sup>e-Learning はこの点に寄与します。

- [13] 荻谷剛彦, 知的複眼思考法, 講談社+α文庫, 2002.
- [14] ピーター・サックス, 恐るべきお子さま大学生たち 崩壊するアメリカの大学, 草思社, 2000.
- [15] 荻谷剛彦, アメリカの大学・ニッポンの大学\* TA・シラバス・授業評価, 玉川大学出版部, 1992.
- [16] Upcraft M.L., Gardner J. N. and Associates, The Freshman year Experience, Jossy-Bass, 1989.
- [17] くらもちふさこ, いつもポケットにショパン ④, 集英社, 1981.
- [18] 高田朝子, 危機対応のエフィカシー・マネジメント 「チーム効力感」がカギを握る, 慶応義塾出版会, 2003.
- [19] ハーヴェイ・セイフター+ピーター・エコノミー, オルフェウス・プロセス 指揮者のいないオーケストラに学ぶマルチ・リーダーシップ・マネジメント, 角川書店, 2002.
- [20] 金子郁容, 新版 コミュニティ・ソリューション, 岩波書店, 2002.
- [21] 玉木欽也監修, eラーニング専門家のためのインストラクショナルデザイン, 東京電機大学出版局, 2006.
- [22] 内田実, 実践インストラクショナルデザイン 事例で学ぶ教育設計, 東京電機大学出版局, 2005.
- [23] 吉田文, 田口真奈, 中原淳, 大学eラーニングの経営戦略, 東京電機大学出版局, 2005.
- [24] 島宗理, インストラクショナル・デザイン-教師のためのルールブック-, 産業図書, 2004.
- [25] 坂元昂 [監修], 中原淳, 西森年寿 [編著], eラーニング・マネジメント-大学の挑戦-, オーム社, 2003.
- [26] 吉田文, アメリカ高等教育におけるeラーニング, 東京電機大学出版局, 2003.
- [27] 小原芳明編, ICTを利用した大学授業, 玉川大学出版部, 2002.
- [28] Ko S. and Rossen S., Teaching Online: A Practical Guide, Houghton Mifflin Company, 2001.
- [29] 梅田望夫, 平野啓一郎, ウェブ人間論, 新潮新書, 2006.
- [30] ロバート・オハロー, プロファイリング・ビジネス 米国「諜報産業」の最強戦略, 日経BP社, 2005.
- [31] 荻原勝, 個人情報 管理規定と作り方, 経営書院, 2005.
- [32] 岡村久道, 個人情報保護法の知識, 日経文庫, 2005.
- [33] 宇賀克也, 個人情報保護法の逐条解説, 有斐閣, 2004.
- [34] プロジェクトタイムマシン著, 梅村陽一郎監修, コンピュータユーザのための著作権&法律ガイド, 毎日コミュニケーションズ, 2002.
- [35] 文化庁編著, 著作権法入門 (平成14年版), 社団法人著作権情報センター, 2002.
- [36] 富山大学経済学部「入学前準備学習」, 2005～  
[http://groucho.eco.u-toyama.ac.jp/lecture/pre-enrollment06/pre-enrollment\\_06.html](http://groucho.eco.u-toyama.ac.jp/lecture/pre-enrollment06/pre-enrollment_06.html)
- [37] 富山大学経済学部「経営モデル分析」,  
<http://www3.u-toyama.ac.jp/shira/lecture/toyama06/model06.html>
- [38] 富山大学経済学部「経営経済の基礎数学II」,  
[http://www3.u-toyama.ac.jp/shira/lecture/toyama06/e-math06\\_hiver.html](http://www3.u-toyama.ac.jp/shira/lecture/toyama06/e-math06_hiver.html)
- [39] 千歳科学技術大学特色GP「知識を共有した効果的な授業の展開- 高大連携によるe-learning構築と教育現場での効果的活用-」,  
<http://www.chitose.ac.jp/result/tokushoku/page2.html>
- [40] 東京大学大学院学際情報学府 iii online,  
<http://iiionline.iii.u-tokyo.ac.jp/index.php>
- [41] LE FIGARO・fr, Amazon travaille 7 jours sur 7, 24 heures sur 24, le 22 décembre 2006:06h00  
[http://www.lefigaro.fr/eco/20061222.FIG000000072.amazon\\_travaille\\_7jours\\_sur\\_heures\\_sur\\_.html](http://www.lefigaro.fr/eco/20061222.FIG000000072.amazon_travaille_7jours_sur_heures_sur_.html)
- [42] Ernest Hemingway, The Sun Also Rises, Charles Scribner's Sons, 1926